

タイトル

「ゴージャスお宝鑑定家〜う〜ん、ゴ
ージャス！」341

登場人物

剛田（ごうだ）：剛田質店の店主で、ゴ
ージャスな品物しか鑑定しない。優雅で
気品溢れる言動を繰り返し、周囲からは

「クセが強い」と思われがち。口癖は「ゴ
ージャス！」

白金（しろがね）：剛田質店の見習い鑑
定士。剛田とは対照的に、現実的で一般
的な価値観の持ち主。神経質で、お宝の
取り扱いに常に緊張している。

客（高岡みつえ）：祖父から受け継いだ
ガーネット茶器を持ち込む女性。歴史や
伝統を大事にする温厚な性格。

あらすじ

ゴージャスな品物しか取り扱わない剛田質店。今回持ち込まれるのは、なんと「ガーネット製の日本茶器」。その独特な品物に剛田の「ゴージャス！」が炸裂するが、果たしてその運命やいかに？

脚本

シーン：オープニング

（豪華なシャンデリアがきらめく剛田質店の店内。クラシック音楽が静かに流れている。）

剛田：（高貴な仕草で店内を歩きながら）
「うくん、今日も空気がゴージャスだ！」

これぞ剛田質店の醍醐味。美しき日常よ！」

白金：（店の隅で書類整理をしながら小声で）「店主、空気のゴージャスさって測れるんですかねえ…」

剛田：（聞こえて振り返る）「白金君、それがわからないようではまだまだ見習い鑑定士だね。ゴージャスとは感じるものなのだよ！」

白金：「（ため息）そうですか…」

（店の扉が開き、着物姿の高岡みつえが品物を抱えて入ってくる。）

客（高岡）：「こちらで鑑定をお願いできるかしら？」

剛田：（優雅にお辞儀して）「お待ちしておりました、お客様。剛田質店へよう

こそ。さあ、そのゴージャスなお品を拝見させていただきましょう！」

白金：（小声で）「まだ何も見てないのに：ゴージャス断定するの早くないですか？」

剛田：「白金君、感じるのだよ！来店の瞬間からオーラは溢れ出ている！」

シーン〽：鑑定開始

（客が布に包まれた品物を差し出す。剛田は優雅な動きで布を広げる。）

剛田：（目を輝かせて）「なんということでしょう：！これは：！」

白金：「え、えっ？何ですか？」

剛田：（急に大きな声で）「ゴージャス！！！」

白金：（飛び上がるほど驚いて）「大きい声出さないくださいよ！何ですかこれは？」

剛田：「見たまえ、この深紅の輝き！これは純度の高いガーネットでできた日本茶器ではないか！」

白金：「ガーネットで？日本茶器？なんでそんなものを作ったんですかね？」

客（高岡）：「祖父が戦後の混乱期に手に入れたもので、特注だそうです。日本の伝統美と宝石の融合を表現したかったとか。」

剛田：「素晴らしい！これはただの茶器ではない、夢と情熱の結晶だ！」

白金：「いやいや、それにしても実用性が……」

剛田：「白金君、ゴージャスとは実用性を超越したものなのだ！」

シーン③：石言葉の熱弁

（剛田が茶器を光に透かして眺めながら語り始める。）

剛田：「ガーネット：それは真実、友情、そして情熱を象徴する石。古代から旅人を守る石とされ、人々の心に希望を灯してきた。この茶器はただの器ではない、心の旅路そのものだ！」

白金：「石言葉まで出てくると：説得力がすごいですね。」

剛田：「そうだろう！これを手にした者は、人生がゴージャスになる運命にある！」

客（高岡）：「そう聞くと手放すのが惜しくなってきましたね。」

シーン④：実際に使う

（剛田が茶器を慎重に持ち、茶道の心得に基づき抹茶を点てる。）

剛田：（動作が一つ一つ非常に優雅で）

「さあ、まずは茶器を温めることから始めるのだ。美しき茶器に美しき心を込める：これぞ茶道の神髄！」

白金：（剛田の動きをじっと見つめながら）「何というか、見るだけで豪華です。無駄に豪華というか！」

剛田：「白金君、『無駄』ではない。これは美の追求だ！」

（剛田は湯呑に湯を注ぎ、静かにお湯を捨て、抹茶を慎重に茶器に盛る。）

剛田：「さあ、抹茶を入れるこの瞬間：心を鎮め、ゴージャスな気を器に込める。」

（剛田が茶筌を取り出し、しっかりとした動作で抹茶を点て始める。）

白金：（少し呆れて）「店主、茶筌の動きがゴージャスすぎて目が回りそうです。」

剛田：（笑顔で）「これが真の茶筌裁きというものだよ！白金君もいずれできるようになるさ。」

客（高岡）：（感動して）「祖父がよく言っていた『茶器は心を映す鏡』という言葉、その意味がわかってきた気がします。」

剛田：「お客様、それこそがゴージャスの真髓です！」

（剛田が抹茶を湯呑に注ぎ、客と白金に手渡す。）

剛田：「さあ、このガーネットの輝きと
抹茶の調和を味わうがよい！」

（白金が恐る恐る一口飲む。）

白金：「すごく渋い：渋すぎる！でも、
美味でゴージャス！」

客（高岡）：（一口飲んで感動しながら）
「本当に美味しいですね。この器だから
こそ出る味わいだと思います。」

剛田：（誇らしげに）「そうでしょう！
これぞガーネット茶器の実力。渋みと高
貴さが調和している！」

（白金が二口目を飲みながらぼつりと）

白金：「高貴さって味に出るものなんで
すね：」

シーン5：金額発表

（剛田が茶器をじっくり鑑定した後、客に向き直る。）

剛田：「お客様、この品物の価値は：」

（間を取った後、高らかに）

剛田：「一千五百万と査定いたします！」

白金：「一千五百万！？そんな高額なものを持つなんて僕には荷が重いです！」

客（高岡）：「それほどの価値があるなんて…感激です！」

シーンの：エピローグ

（客が満足げに帰り、店内には静寂が訪れる。）

白金：「いやー、今日は疲れましたね。

茶器ってあんなに渋い味が出るんです

ね。」

剛田：「うむ、しかし：やはり紅茶がいいな。」

白金：「いやいや、そこは抹茶を推してくださいよ！」

（剛田と白金が顔を見合わせ、笑い声が響く中、幕が下りる。）

尺割り

シーン1：オープニング（約10分）

- 登場人物の紹介、剛田質店の独特な雰囲気を描写。
- 客（高岡）が来店し、物語の導入部分を描く。

シーン2：鑑定開始（約15分）

- ガーネット茶器の発見と剛田のゴージャスな反応。

- 客（高岡）の背景や茶器の由来を説明する。

シーン 3：石言葉の熱弁（約 10 分）

- ガーネットの象徴や意義を剛田が情熱的に語る。
- 高岡が品物への愛着を再確認し、白金が振り回される。

シーン 4：実際に使う（約 20 分）

- 剛田が茶器を用いて茶を点てるシーン。
- 茶道の作法をゴージャスに演出し、ギャグをふんだんに盛り込む。
- 茶器を通じて高岡の祖父の思いが伝わる場面。

シーン 5：金額発表（約 10 分）

- 剛田の豪華な査定とそれに驚く白金。

- 高岡の感動的なリアクション。

シーン9：エピローグ（約10分）

- 緊張感が解け、白金と剛田の軽妙なやり取り。
- 日常に戻りつつも、物語全体の余韻を残す幕引き。